卽身成仏実証としての如来行

有光友逸

一、緒言

従来本宗の行法としては、受持一行、唱題行、菩薩行、仏子行、仏行、如来行と称せられているが、要するに、題目を信受念持することであり、此の行によって本仏の因行果徳の功徳聚が自然譲与せられ、即身成仏してゐるのである。然るに現在の宗義では、この即身成仏の問題も、其の実証といふ面において、未だ明瞭でない。故にこの盲点に乗じられて種々の新義が唱導され、未来成仏、往生成仏、或は現世利益の成仏等が盛行してゐる現状である。私は拙寺に於て開講中の橋本日賢上人による法華経大講話を聴講しながら、実践宗学として研鑽し布教し体験したことによって、本宗の成仏義はこのように実証すべきであると考察したので、浅学をも顧みず、発表させていたゞく次第である。

二、本宗の即身成仏について

成仏への道は、開目鈔、本尊鈔によれば、一念三千であり（六〇四）、これは仏種にあり（五九〇）、妙法五字であり（七二〇）、本仏釈尊の因果の功徳聚たる仏智の題目である（七一一）これを受持することによって即疾頓成する（七一一―二）又、始聞仏乗義（一四五三）妙法尼（一五三七）、太田女（一七五四―五）等によれば「煩悩・業・苦の三道を、受持によって、法身・般若・解脱の三徳と変じ、三身成就するところの煩悩即菩提・生死即涅槃の即身成仏なり」（取意）と仰せられてある。行法は受持である。

受持の行法は、身口意三業に開いて三大秘法の行法組織となる。又この三大秘法は、本門三学としては仏教の根本行法たる戒定慧三学に立脚してゐる。

本門本尊（定）に帰命し、本門題目（慧）を唱へることは、信受念持の本門妙戒である。此の信唱の行によって、本仏の因果の功徳聚が自然譲与せられ、我等凡夫の本体は、無始の古仏となり、本有無作三身の果徳を成就してゐるが、其の外相たる我等の血肉骨髄は、三仏の跡を紹継したものであり、功徳を受得してゐる幼稚の仏である（七一二）。即ち父母所生の肉身を離れずして、本仏功徳聚の一分を成就してゐるのである。時間は本時であり、現世である。この信念に立てば臨終も正念であり、霊山往詣も確信付けられる、此土も其儘常寂光土である。

意業の信心と、口業の唱題とは、別のものではなく、信心の発露が直ちに唱題となるのであるから、本尊に向ひ奉ったとき其のまゝが成仏である。信心は衆生が本有の仏身の体であることを覚るのであるから、従果向因本覚門であり、唱題は修行を為して成仏するのであるから、従因至果始覚門であり、信即唱の信念受持は、再往従果向因始即本の行法であって、成仏してゐるといふ自覚が確立してゐなければならぬ。これ内証の成仏であって、更に現実の肉身の上に成仏の用を起し、本仏の体の全分を成就しなければならぬから、こゝに身業としての本門戒壇の実践がある。

宗祖は、三秘中の定慧二法は遺文中に説明が多分になされてあるが、戒法については御説明が少い。これは宗祖が御自ら法華経色読の実践行動によって其の規範を示されてゐるのであって、我等が宗祖の芳躅を紹継することが本門戒壇の身業である。三業受持は此等の行法が相即円融調和したものである。かくして、即身成仏への行法たる受持は始覚の従因至果の行法たる六度の菩薩行では無くして、始覚即本覚の本覚たる如来行でなければならない。私は如来行によって、本仏の体に即した用を起し、内証外用共即身成仏の妙果を成じ、現身の上に其の実証が得られるものと信ずる。山川博士が「本有本来の仏身を現実の即身において分々に成就するが故に、即身成仏といふ云々」（崎・八三号七五P）と述べて居られるのは、本宗教学上に於ける即身成仏義の定論であらう。

三、即身成仏実証する如来行の順次

（1）即身成仏の自覚

本門本尊に帰命し本門題目を信唱する時、行者は「我れ如来なり」との自覚を持つのである。この時の行者の位は名字即仏、幼稚の如来、強裸の天子、一念信解初随喜品（四信五品鈔、本尊鈔等）であり、其の外相は「以二仏荘厳一而自荘厳」「与二如来一共宿」「頭には大覚世尊かはらせ給ぬ（一一〇〇）」の色読たる凡夫であり、「当知是人則如来使」たる仏使としての使命を悟った者である。然し其の体は既に本有無作三身の本仏の体と一如してゐるのであるから「十方三世、二仏三仏、本仏迹仏」の通号たる如来と称して差支無いのである。而して、如来なるが故に如来の行を行ふのである。譬へばキヨウホウの中にある天子も、成人せられた天子も、始中終帝王学を履修されるのと同様である。

（5）如来行の行法たる室衣座の三軌

如来行は「如来所遣行如来事」「若有能持則持仏身」の文の通り、法華経を受持色読する者の実践行である。室衣

座の軌範により仏心に安住して実践する所の化他即自行の行法であり、万善万行具足してゐる一行一切行、一切行一行の円の行であり、凡夫の身で以て仏作仏行を為すのである。

一切衆生中の大慈悲心、柔和忍辱、一切法空慧の三心が円融調和してゐる如来心を、現代語に訳して親切心と為し、法界の有情非情に対して行ふのである。如来の行動、表現、精神を一分づゝ実践することである。家庭、社会、国家、世界において、又各職域において、最初は幼稚な如来の行為から初めて、一行一行と如来の功徳を積み累ね、仏身を成就して行くのである。

（3）如来行は不軽菩薩品の行意に因る

不軽品の行法は、室衣座の三軌の本門における実践実例である。しかも天台妙楽が指摘し、宗祖が紹継して色読して居られた而強毒之の折伏行であって、無縁の慈悲による如来行に外ならぬ。教弥実位弥下の本化地涌の菩薩乃至その流類が実践すべき行法である。この行意は「我深敬汝等不敢軽慢」の文が示す通り、一切衆生の仏性を尊敬し、一切衆生の三因仏性を撃発し、自他共に成仏を期すると共に、一切衆生に対する驕慢心を押へるのである。「実る程、頭の下る、稲穂かな」の心構えで、すべての行為を、「仏心で親切にさせていたゞく」のである。又、此の行意でもって、如来行が高慢になり易いのを避けるのである。

我深敬汝等の二十四字は本因行であって、妙法五字の受持と同体の行法であるから、この不軽品の行法を分々に実践して行けば、分々に仏身を成就すことが出来るのである（顕仏未来記七四〇、松野一二六六）

（4）主師親三徳の実践

我れ成仏してゐるといふ自覚があれば、主師親三徳を顕現しなければならぬ。世間法において主師親三徳の地位に立つ場合に、室衣座の三軌を、不軽品の行意によって実践する。下位の従、弟、子に望むのに、万事を親切心によって指導啓発するのである。但し大慈悲心には、厳と愛との両義を具してゐることに注意しなければならない。（この項については、同志水谷竜人師が昨年第八回大会にて発表せられてゐるから、詳細は崎報一〇五号、三三九頁往見して下さい。）

（5）煩悩・業・苦の三道を、法身・般若・解脱の三徳と変ず

前記所引、始聞仏乗義等に依れば、三道を三徳と変ずるが即身成仏であると云はれてゐる。煩悩・業・苦を小乗教の如く消滅せしめるのでなくて、就類種の開会を行ひ、法

身・般若・解脱の三徳と変ずるのである。「我れ如来なり」との自覚を以て、如来行の三軌、不軽、三徳（主師親）の行法を以て、法界の有情非情に対して親切に取扱へば、縁因仏性を開発して解脱の果性を成じ、了因仏性を開発して般若の果々性を成じ、正因仏性を開発して法身の大果を成ずる。これ次での如く、応身・報身・法身を成じてゐるのである。又、煩悩は仏智に照されて菩提の種となり、正しい悟りに入り報身如来を成ずる。生死の業の縛は解脱し、涅槃となり応身如来を成ずる。苦果の身土は開いて常寂光の楽土となり、法身如来を成ずる。自他共に仏道を成ずるのである。

かくの如く、如来行を分々に実践して行ったならば、三道は三徳と変転して実生活は自受法楽の妙果を顕はし、遂には、現身に本有無作三身を成就することが出来るのである。

（6）色心相好について

以上説明せる如く、「此経難持」ではあるが、如来行たる「則持仏身」を「若暫持者」すれば、本仏に歓喜せられ護念せられ、勇猛精進の持戒の者は疾く、仏道を成ずる。

又、「深達罪福相、徧照於十方、微妙浄法身、具相三十二以八十種好、用荘厳法身乃至我闡大乗教、度脱苦衆生」の経文の色読が実証され、本仏の色心相好の一分づゝ成就して、人相が仏相に近付き、遂には円教的八相成道を遂げるに至ると信ずる。

四、結　語

かくの如く、即身成仏の実証は、如来行の行法によって出来得るのである。信即唱の当所に成仏してゐるといふ自覚と自信とを以て、本仏の精神たる南無妙法蓮華経を、如来行の行法により、身行として実践するのである。これによって、本仏の体に即した用を起し、現実の即身において、本有本来の仏身を分々に成就して行くことが出来るのである。但し云ふまでも無く、本門三宝に対する一心欲見仏不自惜身命の大信念に立つ実践こそが肝要であって、実践を経て初めて即身成仏の妙味が体得されて来るものである。

我等本化地涌の菩薩の流類は、如来行の実践によりて宗祖の芳躅を紹継し、色読し、以て即身成仏の大果を現じ、遂には立正安国四海帰妙の実現を期し、世界人類を破滅の苦境より救出すべき使命をもってゐる者なりと確信し、誓願し実行しつゝあるものであります。